

ゼロインバー合金の中核拠点

新報国製鉄・三重工場

新報国製鉄は、2017年1月1日付で100%子会社だった新報国製鉄三重を吸収合併し、製造部門の中核拠点を「新報国製鉄・三重工場」として新たにスタートさせた。一体化することで本社（埼玉県川越市）と工場における意思決定の迅速化と組織運営の効率化を追求し、鋳鋼製品の競争力強化を図る。このほど、新生・三重工場を訪れ、付加価値の高い「超高剛性インバー合金」の製造現場取材した。

工場ルポ

よりの月産能力150トと5割拡大する。レイアウトを変更することで生産効率も向上。能力増強と効率化を両立させ、現場の競争力を高める狙いだ。能力増強後は、3ト炉と2ト炉が1基ずつ



3ト炉から転炉に移す作業

「大型投資と成長戦略」を指している。成瀬正社長は「社員の士気を上げることを考えた。3月期（創立70周年）までの3力年で総額8億5000万円の設備投資と成長戦略を語る。その中核となるのが、三重工場だ。半導体、液晶、有機EL製造装置向け低熱膨張合金（インバー合金）や、



横井工場長

孔工具、製鉄所向け耐熱合金、耐摩耗鋳造合金などを生産。近年は高剛性ゼロインバー合金、耐熱ゼロインバー合金など、熱膨張係数がゼロでヤング

溶解炉を新設し、17年つ、1ト炉が3基、700キログラムが1基の4電源6炉体制となる運び。老朽化した1ト炉を新たに導入し、既存炉（1ト炉2基）の電源も更新する。これ

宇宙・航空向け実用化へ

要家の納期に依りて操業は1直から2直体制と柔軟なシフトを敷き、地場の外注先とタッグを組んで付加価値の高い鋳鋼製品を造り込む。横井工場長は「うちの特長は、JIS規格品をほとんどやっていないこと。新報国ブランドでニッチな需要を取り込む。本社の研究部隊とコラボして高品質の鋳鋼を生み出していきたい」と意気込みを語る。

【安全・環境面にも配慮】

近いうちに来るといわれる東南海地震。三重工場は伊勢湾から数キロに位置し、中部電力川越火力発電所が目と鼻の先にある。地元自治体によると、大規模地震が発生した際には最大2メートルの津波が来る」と予測されている。敷地は海拔1・7メートルにあるが、電気炉のある鋳造工場と変電所を

同時に活用でき、製品の最大重量を4トから5トに引き上げられる」（横井裕三工場長）とメリットを強調する。これまでの2トの鋳鋼を製造する際には「1ト

83511
敷地面積 1万4047平方メートル（建物 4116平方メートル）
生産品目 半導体・液晶・有機EL製造装置向け低熱膨張合金、各種ウエハー用精密研磨定盤向け低熱膨張合金、シームレスパイプ用穿孔工具、製鉄所向け耐熱鋳造合金、耐摩耗鋳造合金、製鉄所向け耐熱鋳造合金・耐摩耗鋳造合金、各種合金材（圧延材、伸線材、溶接棒）、非鉄合金（チタン研磨品、錫合金ラッピングプレート）など。

守るために、周囲を高さ90センチの厚鋼板で覆った止水壁を設置した。「念には念を入れて高さ90センチとした」（横井工場長）といい、BCPの観点から万が一に備えた取り組みにも余念がない。

全体で約50人が三重工場に働く。平均33歳程度と若く、「実感として優秀な高卒社員が2〜3年で増えた」（同）という。付加価値の高い製品の比率が高まり、収益が伸びる。結果として地元定着を志向する高校生も集まっている。横井工場長は「家族に見せても恥ずかしくない美しい工場を目指す」と話し、職場環境の一層の改善にも注力していく方針だ。

（菅原 誠）

▽三重工場概要
住所 三重県三重郡川越町大字高松字中島

主要取引先 二コロン、キヤノン、不二越機械工業、ローム、LIXIA、新日鉄住金、JFEスチール、山陽特殊製鋼、日立金属、IHIEアロックス、パラマウント硝子工業、青森オリパス、TDK、日本製紙、王子製紙など。